

大手企業からNPO法人へ飛び込んだリエゾンシニアの活躍事例

■ 60歳定年を機にNPOへの出向を選んだ本田さんとは

花王株式会社で、新卒入社以降、商品開発部門、広告部門、国際事業部門で、厳しくも温かく育ててきてもらったと述懐するのは、花王からNPO法人への出向する向第1号となった本田恭助さん。

本田さんは、花王での長いキャリアの中で、「会社の存在意義や、存在価値を徹底的に問い直す業務」にも係わる中で、自然と「社会における企業の存在価値」を考える思考回路が身に付いたと言う。

そんな本田さんに転職が訪れたのが50代に差し掛かった時期の「故郷長崎の両親のダブル介護」。毎月のように週末長崎に戻り、両親の介護にも奔走する10年間で始まった。その時期に痛感したのが、「人は地域と共に生きている」ということ。退職後は、両親の介護でお世話になった地域の方々に、心から恩返ししたいと願うようになっていた。

■ 日本NPOセンターで揺さぶられた価値観

59歳の時に、定年後の再雇用希望者向けの社内説明会で、配置ポストとして日本NPOセンターへの在籍出向があることを知り、両親の介護の恩返しの意味や、会社でこれまで培ってきたことを活かせる場

所ではないかと思いい、60歳で未知の世界に飛び込むことを決意した。そんな強い思いを胸に出向した本田さんを待っていたのは、「価値観の違い」であった。企業でのマネジメント経験を活かし、組織管理の枠組みを持ち出す本田さんは、周囲のメンバーから「ここは会社ではない。社会を良くするための場所だ」と反論されたと言う。

出向当初は戸惑いも多かった本田さんであったが、徐々に自分の内面での変化に気づき始める。社会的な弱者に対しても、以前抱いていた「それは自己責任ではないのか」の疑問は消え、「境遇の違いを乗り越え、みんなで支えあうべきだ」と思うようになった。

本田さんは、今後について「NPOと企業の懸け橋(リエゾン)になりたい」と熱い思いを抱いている。



本田恭助さん

■ 本田さんが恩師と仰ぐ藤沢のリエゾンシニアとは

そんな本田さんの変化のきっかけになっ

たのが、NPO法人の草分け的存在ともいわれる「認定NPO法人藤沢市民活動推進機構」理事長の手塚明美さんとの出会いだ。自信を持って書き上げた企画書を、出会って間もない手塚さんに見事に否定された」と苦笑いしながら4年前を振り返りかえる本田さん。

花王で長年管理職として活躍してきた本田さんと、藤沢市でNPO法人を引っ張ってきた手塚さんとの間でどんなやりとりが起きたのか、次号で見たい。

池口武志(いけぐち・たけし)

一般社団法人定年後研究所理事  
1963年生まれ。1986年日本生命保険相互会社入社。現在、株式会社星和ビジネスリンク取締役常務執行役員、キャリアコンサルタント(国家資格)としても活動中。



一般社団法人定年後研究所

人生100年時代の中で、中高年社員のセカンドキャリアの充実に向けた調査活動を展開中。定年前後からの自走人生にチャレンジする会社員と、それをサポートする企業を応援。当記事へのご意見ご感想を、ポータルサイト <https://www.teinengo-lab.or.jp>「お問い合わせ」にお寄せください。

当ページのバックナンバーは、上記サイトをご覧ください。